

中東現代史の要

リクルート=スタディサブリ講師 村山 秀太郎

イスラム教徒の軍門に

入試問題に世界最古の都市の1つダマスカスが出題される場面が3つある。まずは古代オリエント世界で交易に長けた「アラム人」の中心都市。ユダヤ(ヘブライ)人の族長アブラハムは「約束の地」に向かう途中、そこを通り抜けたと『創世記』は伝える。前11世紀、ダビデ王がダマスカスに守備隊を置き、その子ソロモンの勢力圏つまりヘブライ王国領となる。その後は、アッシリア→イラン人アケメネス朝→ギリシア人アレクサンドロス大王の帝国→同セレウコス朝と支配層は変遷し、シリアは前64年にローマの属州となった。ローマ帝国の時代に、ユダヤ教パリサイ派のサウロがクリスチャンに対する迫害の運動を進めていたさなかダマスカスに向かっていた時、復活し昇天し、天に現れたイエスにより盲目にされたが「転向」し、同地のアナニヤという男によって治癒開眼、パウロの名で知られる使徒となった……、はキリスト教最初期の話だ。7世紀、アラブ人のイスラム教徒の軍門に下り、ダマスカスは初のイスラム王朝、ウマイヤ朝の都となり、ウマイヤ・モスクが建立された。これが、入試に出る2つ目の話題だ。

“男たち”に“捕獲”され

1991年12月。私はカイロのシリア大使館でビザを取得し、80歳近い祖母と2人空路ダマ

スカス入りし4泊した。あるとき街の広場で当時流行のポケットムービーをまわしていたら、突然数人の“男たち”に囲まれて警察署に連れて行かれた。撮影は自由なのだが、軍事施設か何かの方角にムービーを向けてしまったのだろう。祖母には「ここから動かないで！ ここへ戻ってくるから」と言うと、「はいはい」と静かな返事。ソ連が満州に侵攻した際に、母を含む5人の幼児を連れて帰国した祖母の肝は据わっていた。警察署では「ムービーを渡せ」と言われたが、「署長を呼んで！ 撮影内容を再生して見せる」と言って、出て来た署長に日本のパスポートをチラリと見せたら、即刻釈放となった。“男たち”は浮かぬ表情だった。かれこれ一時間後に“捕獲”された広場に戻ってみると、冬のシリアの寒空の下、祖母はベンチに座っていた。“男たち”はたぶん私服警察なのだろう。

日帰りで隊商都市パルミラをバスで往復した。帰りのバスのラジオのニュースの音が「ソ連ソ連ソ連！」と叫んでいるので運転手に「ど



うした？」と尋ねたら「ソ連が終わった」と。祖母と母を追い立てたソ連崩壊の報に驚きつつ戻ったダマスカ